

## エイジズム(年齢差別)の撤廃に向けて

## 袖井孝子

Takako Sodei

お茶の水女子大学名誉教授・一般社団法人シニア社会学会会長

私が初めて「エイジズム (ageism)」という言葉に接したのは、バトラー博士がピューリッツァー賞を受賞した直後の1976年ではなかったかと思う。当時、購読していた「ナショナル・オブザーバー」というアメリカの週刊新聞(77年に廃刊)に掲載されたバトラー博士のエッセイに、強い衝撃を受けたことを覚えている。

「エイジズム」という言葉自体、非常に新鮮だったが、それ以上に印象的だったのは、性差別 (sexism) と年齢差別 (ageism) の二重の差別を受ける高齢ひとり暮らし女性への言及だった。「高齢のひとり暮らし女性が陥っている窮状については、ウーマンリブの運動家さえも見落としてきた」という鋭い指摘は、老年学と女性学の研究者として歩み始めたばかりの私にとって大変な衝撃だった。当時、ウーマンリブが目標にしていたのは、中高年既婚女性の経済的な自立であり、高齢女性については、まったくその視野に入っていなかった

といっても過言ではない。

「高齢者は、貧乏で、病気がちで、判断力に欠ける」というステレオタイプのな高齢者イメージを払拭し、高齢者が積極的に社会や政治に参画することで、現に高齢者が陥っている窮状から脱出できることを説いたのがバトラー博士だった。

高齢者、女性、少数民族など社会のマイノリティに対して、常にあたたかいまなざしを注いできたバトラー博士のまいた種は、今や世界各国で花を咲かせている。

日本でも、近年、政府は高齢者の雇用の場や住宅の確保およびひとり暮らし高齢女性の貧困問題の解決に向けて動き始めた。アメリカ以上に年齢の壁が厚い日本社会ではあるが、21世紀超高齢社会を乗り切るには、エイジズム(年齢差別)を撤廃し、高齢者が社会や政治に積極的に参画することが不可欠である。



1995年、日米高齢化シンポジウム(大阪)での博士と筆者